

オーケストラ等の大規模アンサンブルと協奏曲の演習、および発表

音楽科 小山和彦

1. 背景・目的

音楽科では、2003年にカリキュラム改定を検討し始めた時、一層のアンサンブル教育の充実を提唱することになった。弦楽合奏、管楽器アンサンブルという授業がカリキュラム上に組み込まれるようになったのはそれ以来である。また、実技系の専攻を担当する専任教員は、ピアノと声楽のみだったが、2004年度より弦楽器の契約教員を採用し、弦楽器に対しても指導する上でさらなる充実を計ることとなった。しかしながら、本学音楽科における当時の管弦楽器の専攻はフルート、ヴァイオリンのみで両専攻生は少数であった^①。各楽器専攻生のみで充実したアンサンブルを行うには、ピアノとのデュオ(二重奏)はともかくとして、レパートリー(作品)も不足し、消化する楽曲数が圧倒的に足りない^②ので、当然のこととして様々な音楽活動する上で現場に適応した演奏能力は培われない。特に管楽器アンサンブルでは、本学の専攻楽器の種類では木管五重奏のようなスタンダードな編成の楽曲を取り扱うことも出来るわけがない^③。そこで、技量の差があるとはいえ、副科楽器履修者をも含めアンサンブルを組織すること、そしてカリキュラム上は弦楽合奏、管楽器アンサンブルというように授業自体は分かれていても、両者を合同で授業をする形態を授業担当者間で模索することとなった。副科楽器を含めれば、これまで専攻楽器としてはなかった弦楽器ではヴィオラとチェロが、管楽器ではクラリネットが加わり、室内オーケストラに近い編成を組織することが出来る。また、コンサート等の発表時には必要に応じて、助演者を依頼することにより既成のオーケストラ作品を演奏する機会が徐々に増えてきている。

上述のように管弦楽器の各専攻は楽器の種類が少なく、各学年定員35名という少人数の音楽科では大規模なオーケストラを組織するのは不可能に近いが、室内オーケストラ的な方向で比較的少人数のアンサンブルを中心にしつつも、その都度助演者の協力があれば、後述のようないろいろな音楽作品を演奏することが可能となる。さらに一歩進んで、本学音楽科で可能な範囲で、オーケストラの特色をどのように打ち出し、他大学との差別化を図るということも必要である。また、実際の音楽活動において有効に機能することが何かをも検討、実践してゆくべきである。

そこで、作曲の専任教員が、本学の楽器編成に合った作品を書き下ろし、履修者達によってその新作を演奏することも、その特性を生かすことを検討するひとつの試みとして行われている。2006年12月には著者が作曲した「明日へのシンフォニア」を学内で初演した。演奏時間は6分程度であるが、楽器編成はフルート、クラリネット、ファゴット(管楽器アンサンブルの授業担当の本学非常勤講師の専攻楽器である)、第1・2ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバスである。この編成なら、コントラバス以外は助演者の必要がなく、それによりほぼオリジナルの状態の編成で授業が可能となる。また、当時の学生の全体的な演奏技量にも配慮して作曲することも出来るのである。授業においても、指導者、演奏者(履修者)、時には作曲者の三者が直接コンタクトを取りながら、作品の演奏を作り上げてゆくことも出来るのである。

この教育推進研究の内容とほぼ同様な形態での授業、その発表、および音楽科の行事の一環として行われたのは、2009,2010両年に「オルケス

トル・ドゥ・シャンブルコンサート」というタイトルの学内演奏会、そして毎年開催されている学外の仙台市青年文化センターと学内の大学講堂を会場にした「音楽科コンサート」である。

前者の「オーケストラ・ドゥ・シャンブルコンサート」では管楽器アンサンブル、弦楽合奏の履修者によるオーケストラを母胎とし、楽曲によって不足するパートを助演者で補っている。演奏曲目としては、ハイドンが比較的初期に書いたシンフォニー、ホルスト作曲「ブルック・グリーン組曲」などに加え、ピアノ実技担当の非常勤講師をゲストに迎え、ピアノ協奏曲もプログラムに含めた。

2009年2月は土田定克氏の独奏でショパン作曲「ピアノ協奏曲第1番」、2010年2月には海鉾智子氏の独奏でハイドン作曲「ピアノ協奏曲」を、それぞれ本学非常勤講師・佐藤寿一氏の指揮で演奏した。このコンサートでは独奏者に学生ではなく、教員を起用した理由としては、まず学生に高い演奏レベルの手本を提示することにある。オーケストラの中には副科楽器履修者が多いことはすでに述べたが、その履修者中にはピアノ専攻の学生も多く、彼女らが協奏曲の独奏パートの演奏を目の当たりにしつつ、演奏に参加できる体験は他の音楽大学でもなかなか出来ない貴重な体験といえる。

また、2010年のコンサートでは著者作曲の「明日へのシンフォニア」が再演されたことも付け加えておく。

この「オーケストラ・ドゥ・シャンブルコンサート」は授業の成果発表という意味合いではあるが、当時は弦楽器担当教員の個人研究の一環として音楽科では位置づけられていて、教育的な効果

が非常に高いにも拘わらず、音楽科の主催事業にならなかったことは誠に残念であった。

2009年に開催された「音楽科コンサート」では、メインのプログラムとしてグリーグ作曲「ピアノ協奏曲」を演奏した。この際の演奏者は、上述のように副科楽器履修者が大きいパーセンテージを占める学生のオーケストラと、独奏者もオーディションによって選ばれたピアノ専攻生という本学音楽科としてはこれまでにない画期的な出来事であった。翌年2010年にはショパン生誕200年という記念の年ということ、もちろんピアノ協奏曲として重要なレパートリーということもありショパン作曲「ピアノ協奏曲第1番」を取り上げた。これらのことが可能となったのは上述の「オーケストラ・ドゥ・シャンブルコンサート」というオーケストラをする上での、教育、組織構成上、その他諸条件の基礎固めがあった上で可能となったのである。

さて、ピアノ協奏曲の演奏体験の機会、および有効性ということについて、日本の音楽大学における諸事情を交えながら一言申し上げたい。

日本の音楽大学、あるいは音楽科を持つ大学は近年の受験生減少に伴い、独自性を打ち出し、学生にとって魅力ある環境を創り出そうと苦慮している。すでに書いたことと多少重複するが、本学音楽科では、上述のアンサンブル教育の充実に関連して、ピアノ専攻の学生に独奏だけではなく、多様なアンサンブルをどのようにして体験させるかが、専攻楽器の少ない学科としては課題のひとつではある。また、オーケストラと共演する協奏曲(コンチェルト)の体験は大変魅力的であるが、オーケストラとの合わせ、時間、その他の条件から多くの大学では、学生の間に体験すること

は非常に難しく、そのような機会があったとしても、独奏者(ソリスト)に選ばれることは大変狭き門である。そういった意味では少人数制の本学音楽科では、ソリストに選出される可能性が高く、それによりピアノの学習意欲が高まることが期待できる。

少人数の学科ならではの特色を生かすということは、つまり少人数であることの制約、障害をいかにして教育上のメリットに変えてゆくか、そういった過程をここまで辿ってきた。

また、「総合アンサンブル」という名称の授業を2010年度から新設した。これにより1年次からオーケストラの授業を履修出来、場合によっては副科にない楽器による参加も認められ、履修者の幅も広がりつつある。

これまでの経過についての記述中にほぼ、この教育推進研究の目的についての記載があるのでなるべく重複は避けるが、補足的事項としては以下のようなことがある。

この教育研究の大きな特長として、まず母胎となるオーケストラに参加する学生が専攻楽器の学生より、副科楽器履修者が多いことである。特に本学ではピアノ専攻の学生が多いが、発音形態の違う別の楽器を履修することにより、音色感の育成に効果があり、またオーケストラ等のアンサンブルの実践によって音楽を立体的に把握する力、他者の出す音を客観的に聴き、判断する力を育てるには大変効果があると考えられる。

いずれにせよ、本研究によって音楽科の多くの学生が取り組むことが出来、かつ音楽的に大きな効果が上がるのは言うまでもない。

- (1) カリキュラム改訂前、フルート専攻生は恒常的に入学していたが、ヴァイオリン専攻の学生は全学年に1名、もしくは0名という状況が多かった。2004年のカリキュラム改定後、さらに若干の改定を行って、チェロ専攻、次いでヴィオラ専攻の学生を募集している。参考までに2010年度の管弦専攻の学生数はフルート専攻6、ヴァイオリン専攻1名、ヴィオラ専攻1、チェロ専攻1の計9名である。
- (2) 管楽器のレパートリーは弦楽器のそれに比して圧倒的に少ない。また、管楽器のみのアンサンブルでは木管五重奏以外にはスタンダードな編成は特になく、その編成のために書かれた作品も非常に少ない。

2. 実施内容

この教育研究はコンサート等による成果の発表と、授業におけるトレーニングであるが、発表についての記述を中心とする。

① 2010年7月24日(土)

オープンキャンパスにおけるミニコンサート

会場: 宮城学院礼拝堂

曲目:

- ・ホルスト作曲「ブルック・グリーン組曲」
- ・ハイドン作曲「オルガンとオーケストラのためのコンチェルト」Hob.XIII:1

オルガン独奏 音楽科3年 改正若葉

② 2010年10月31日(日)

音楽科コンサート

会場: 宮城学院女子大学講堂

曲目: (本事項に関連する曲目のみ)

- ・ショパン作曲「ピアノ協奏曲第1番」

ピアノ独奏:

第1楽章 音楽科4年 曾根由里子

第2,3楽章 音楽科4年 梶木美紗

③ 2011年2月5日(土)

オーケストラ・ドゥ・シャンブルコンサート

会場: 宮城学院女子大学講堂

曲目:

- ・ホルスト作曲「ブルック・グリーン組曲」
- ・小山和彦作曲「季節のポートレート」(初演)
- ・チャイコフスキー作曲「憂鬱なセレナード」
ヴァイオリン独奏: 音楽科3年 千葉玲奈
- ・ハイドン作曲 シンフォニア第6番「朝」

Hob.I:6

独奏: 千葉玲奈 大築萌 小野友里恵

小笠原綾香 畠山桜

コンサート、および実施に至る経過と詳細

① 2010年7月24日(土)

オープンキャンパスにおけるミニコンサート

毎年開催される7月のオープンキャンパスは、多くの受験生が本学に見学を訪れるが、本学の広報目的とリンクして、前期の練習の成果を発表する場である。助演はオーボエ2、トランペット2、ヴァイオリン3、ヴィオラ2、コントラバス1の計10名に加え、授業担当の菊池恭江(ヴァイオリン)、増川大輔(チェロ)、持田富士美(ファゴット)の各氏がオーケストラに加わった。指揮は佐藤寿一氏による。

本学はキリスト教主義大学で、その恩恵によってパイプオルガンが礼拝堂と音楽館ハンセンホールに主なものがあるが、機会があればそのオルガンを出来るだけ活用することも念頭においている。今回は、ハイドン作曲「オルガンとオーケ

ストラのためのコンチェルト」をオルガン専攻生によって演奏した。

ホルスト作曲「ブルック・グリーン組曲」は今年度だけでも2回取り上げられているが、これは本学音楽科のオーケストラの編成に近く、このオーケストラの授業と発表の際に重要なレパトリーのひとつである。繰り返し取り上げることによって、演奏の完成度を高め、作品の細部について演奏者が知悉することとなる。

② 2010年10月31日(日)

音楽科コンサート

ここではメインのプログラムとしてショパン作曲「ピアノ協奏曲第1番」を演奏した。

ピアノ独奏者はピアノ専攻生全学年を対象とした7月に行われたオーディションによって選出した。オーディションの担当教員は浅野繁、野沢真弓の両氏が中心となり、概要等の検討をし、独奏者の決定のとりまとめでは中心的な役割を果たした。

選考に当たっては演奏するチャンスを出るだけ拡大するため、第1楽章と第2,3楽章の独奏者はそれぞれ1名で計2名とした。

オーディション参加者は5名と少なかったが、これは公示をする時期がやや遅くなった上、テクニク的には高い難易度の協奏曲であったことが理由としてあげられる⁽⁴⁾。

コンサートの演奏に際して、事前のリハーサルは前日と当日(ゲネ・プロ)の2回で、オーケストラの助演者はその2回に参加することになる。編成上、必要な助演はオーボエ2、ファゴット1、ホルン4、トランペット2、トロンボーン1、ティンパニー1、ヴァイオリン4、ヴィオラ2、チェロ1、コントラバス1の計19名に加え、授業

担当の菊池恭江(ヴァイオリン)、増川大輔(チェロ)、持田富士美(ファゴット)の各氏がオーケストラに加わった。指揮は佐藤寿一氏であった。

④ 2011年2月5日(土)

オーケストラ・ドゥ・シャンブルコンサート

このコンサートではオーケストラに後期開設の科目の「総合アンサンブル」履修者が加わった。演奏曲目としてここでも「ブルック・グリーン組曲」を取り上げたが、その意義については上述の通りである。休憩前にこの教育推進研究の代表である著者が作曲した「季節のポートレート」を初演した。この作品はこの演奏会のため、本学音楽科のオーケストラのために書き下ろした作品である。全体は3曲の組曲となっていて、演奏する上でも、聴く上でも曲想を理解しやすくするために各曲にタイトルを付した。それぞれ

1. 初冬の散歩道
2. 静かな春の訪れ
3. 夏の大海原

という具合にである。また、オプションとしてホルンパート②が書かれているが、本学の事情を考慮し、なくても演奏可能にしてある。

休憩後には、チャイコフスキー作曲の「憂鬱なセレナード」がヴァイオリン専攻生の独奏で演奏された。背景・目的の項目でもピアノ協奏曲の独奏者の意義についての説明があるが、もちろんヴァイオリンだけでなく、独奏者としての体験の機会は、なかなか得られないだけでなく各楽器の専攻生にとって貴重な体験となる。

最後の曲目としてハイドン作曲のシンフォニア第6番「朝」が演奏されたが、この楽曲の形式はコンチェルト・グロッソ(合奏協奏曲)となっている。つまり、オーケストラ中に複数の独奏者が

内在している形である。独奏者としてフルート、そして弦楽器専攻生だが、1名は専攻生でなく、副科楽器の履修者もいたことが大きな点である。

これだけの充実したプログラム、それに向かつての練習も十分な練習を学生がしたにも拘わらず、A日程入試直後の土曜日だったこともあり、観客数がやや少なめだったことが残念であった。

- (1) ショパンの作曲したピアノ協奏曲は第1番と第2番の2曲あるが、いずれもワルシャワで4年ごとに開催されるショパン国際コンクールの課題曲で、最終選考に残った参加者のみがオーケストラと共演できる曲目である。
- (2) オーケストラでは、ホルンは中音域においてかなり重要な役割を果たす楽器である。コンサート当日は、ホルンが編成上必要な楽曲があり、サウンドの充実上ホルンパートを追加した。

3. 結果及び考察

カリキュラム上「弦楽合奏 A,B」、「管楽器アンサンブル A,B」、「総合アンサンブル」という3つの合同科目から成り立つオーケストラの授業を履修した学生は、今年度中に3回のコンサートに出演し、計5曲の楽曲をこなした。楽曲の演奏時間では、トータルで2時間程度になる。

各楽器の専攻生が少なく、非専攻の履修生が多いオーケストラで、しかも原則週1コマの時間内でコンサートの曲目をすべて仕上げたことは大いに評価できる。この教育的なプロジェクトは単年度のみでなく、「背景・目的」の項目中にあるように、約8年の歳月をかけてようやく本学音楽科の特色のひとつとなりうる形として結実しつ

つあり、しかも今年度は教育推進研究費の補助を受けたおかげで、助演者の謝礼金の問題と楽曲の編成との狭間で検討していたプログラムに今回は比較的融通が利くようになり、曲目、演奏内容においても充実したものとなった。また、「オルケストル・ドゥ・シャンブルコンサート」も今年度から音楽科の主催事業として位置づけられるようになった。

ショパンのピアノ協奏曲の独奏者についても、上述のように難曲にも拘わらず、一定のオーディション参加者があり、ピアノ教育の幅も広がっている。昨今の音楽大学学生のレベルは、受験生の減少に伴いレベルが低下しつつあるが、一定のレベルをある程度保ち続けている本学音楽科は、この取り組みだけでなく、アンサンブル教育に対する姿勢があるとも考えられる。

なお、ピアノ協奏曲の独奏者として参加した2名の学生は3月に開催する卒業演奏会にも出演することを付け加えておく。

しかし、コンサートをする、つまり、観客に演奏を提供するためにまだ様々な観点において課題が残るのも事実である。

専攻楽器の学生が少なく、助演者も人数的、時間的両方の側面から最低限しか依頼していない難しい条件の下で組織し、授業時間上大きい制約がある学生のオーケストラとしては仙台市内のみならず、東北地方全体としては比較的高いレベルにあるといえるが、さらに基本的な楽器のテクニックを向上させるための体制を構築する必要があること。また、多くの楽曲を演奏する上だけでなく、アンサンブルをする際、自分、そして他者の音を聴くゆとりを持たせ、楽曲構造の全体像をしっかりと把握する意味でも楽譜を的確にスピ

ーディーに読む能力を養成してゆく必要がある。

運営面では、まず練習時間、要するに授業時間だが、一週間に1コマ80分の時間帯のみでは、臨時練習がコンサートの前にあっても明らかに時間が不足している。カリキュラム的な問題も含め、この時間の不足については非常に大きな問題である⁽⁴⁾。また、現在のところ単位としては単年度のみしか認定されないの、再度履修可になるようにカリキュラムを検討しないと専門的な実習として、かつ完成度の高い演奏につながらないのは自明の理である。

実施内容の項目で触れたとおり、コンサートの際には、時期的な不都合とも関連して観客動員数が少ないことがあった。学生がイベントをする際に、自発的に宣伝する力が欠けていることがある。単に授業の発表だからという姿勢ではなく、周囲だけでなく、外部の人々ともどのようなコミュニケーションをとり、働きかけられるかが、本学の学生だけではなく、最近の学生にとって大きな課題であろう。また、コンサートは演奏する側にとっても、多くの観客に聴いて頂くことは最も大切なことのひとつであり、プロの演奏家、演奏団体でもその点に苦慮し、奮闘している。

オーケストラという複数の人間によってアンサンブルをする演奏形態は、団体スポーツと同じようにチームプレイがいかにか円滑に出来るかということと、演奏の完成度の高さは全く比例する。それは、演奏技量だけではなく、すでに触れたとおり、広報活動、演奏会・練習の運営、その他複合的なことも関係してくる。今のところは、あまり広報や運営面に学生が関わっていないが、今後はそういうことを徐々に体験させ、学生の運営が

中心となったコンサートが出来るようにしてゆく必要があるであろう。

(1) 音楽大学の専攻生によるオーケストラの授業では週に2コマ分の授業時間が確保されているのが一般的である。

(資料)

今年度、弦楽合奏 A,B、管楽器アンサンブル A,B、総合アンサンブルを履修して、オーケストラに参加した学生⁽¹⁾と授業担当者、および助演者⁽²⁾は以下の通りである(順不同)。

・弦楽合奏 A(弦楽器専攻生)

小野 友里恵 千葉 怜奈

・弦楽合奏 B(非専攻生)

佐藤 愛美 吉田 渚沙 菅野 成美

齊藤 美咲 佐藤 郁美 佐藤 偲

佐藤 暢子 佐藤 宏美 柴田 詩織

清水 晶子 下田 葉月 高橋 佳那

山石 奈津季 吉田 元子 木口 恵

吉田 愛梨

・管楽器アンサンブル A(管楽器専攻生)

佐藤 侑菜 高野 菜々子

佐藤 まどか 佐藤 友美

・管楽器アンサンブル B(非専攻生)

五十嵐 美沙 大槻 みゆき 神田 麻衣

小関 志穂子 佐藤 麻衣 千葉 梨沙

畠山 桜 佐々木 藍

・総合アンサンブル(1学年)

大岩 千華 大友 志穂 小笠原 綾香

川村 智英子 菅野 麻樹 佐々木 紗也夏

細谷 優紀 横浜 理保 渡邊 楓

以上 39 名

授業担当教員

弦楽合奏 A,B、総合アンサンブル担当

菊池 恭江 増川 大輔 佐藤 寿一

管楽器アンサンブル A,B、総合アンサンブル担当

持田 富士美 佐藤 寿一

助演(パートごとの人数のみ記載)

オーボエ 4 ファゴット 1 ホルン 4

トランペット 3 トロンボーン 1

ティンパニー 1 ヴァイオリン 4 ヴィオラ 2

チェロ 1 コントラバス 1

計 22 名

(1) 履修者の内、若干名の単位途中放棄者も記載してある。

(2) 授業担当教員は省いている。曲目によっては編成に含まれない楽器もあるので、ここに記載された助演者数は、のべ人数である。